

日系ブラジル人幼児の異文化適応に関する事例的研究（Ⅱ）

——入園当初3カ月間の分析から・2児の比較——

中 西 由 里 ・ 宮 川 充 司

Case Studies on the Intercultural Adjustment of Japanese-Brazilian Children (II)
——A Quantitative Analysis on First Three Months of Their Japanese Nursery Life——

Yuri NAKANISHI and Juji MIYAKAWA

問題と目的

我が国に居住する外国人の数は近年急増している。その背景としては、日本の高度経済成長や国際化の進展がある。また、とりわけ1990年に入国管理法が改正されてから、ブラジルやペルーといった南米の国から日系人労働者が数多く来日するようになってきた。そうした中で1992年には外国人登録者の数が我が国の総人口の1%を越えたことも明らかになっている。こうした在日外国人をとりまく状況については、我々の一連の報告の宮川・中西（1994）で詳しく述べてあるので、本稿では繰り返しを避け、本報告に関連する部分だけ再度書き記すことにする。

我が国で生活する外国人の8割近くはアジア出身者であるが、最近では南米出身の日系人の増加が目立ち、全体の14.6%を占めているという。これらの日系人労働者は1991年12月の時点で愛知県・静岡県・神奈川県で特定地域に集中しているという（国友, 1992）。

こうした人たちは、家族ぐるみで来日することも少なくないため、当然、日本で暮らす外国人の子どもの数も増加している。そうした子ども達の多くは学齢期やそれ以下の年齢であることがほとんどである。また、両親揃って就労している場合も少なくないため、学校や幼稚園・保育園においてそうした子ども達を受け入れているケースが急増している。特にこうした外国人の子どもの多い地域の自治体ではかなり前向きな受け入れのための取り組みがなされている（愛知県教育委員会, 1993；宮川, 印刷中）。

また、たとえば保育行政においては、名古屋市民政局児童部保育課では5つの外国語に対応した「保育所日常会話集—みんなともだち—」（1992）を発行している。また豊田市教育局教育委員会は「外国人子女教育 ポルトガル語対応指導資料集—会話集・学校案内・物語文—」（1993）を発行している。また遅ればせながら文部省（1992, 1993）も外国人子女向けの日本語の教科書「にほんごを まなぼう」, 「にほんごを まなぼう2」を発行している。

在日の外国人の子どもの学校や幼稚園・保育園への受け入れは、まずニーズがあり、現場で試行錯誤での受け入れの取り組みを始め、遅れて行政側が何らかの対応を考え始めるといった構図になっているようである。そうした受け入れ現場においても数年前からの受

け入れ経験の蓄積を元に独自のノウハウの見通しを持っているところから試行錯誤でとりあえず受け入れ実践中というところまで様々である。

一方、こうした外国人の子どもの日本社会や我が国での集団生活（学校、幼稚園・保育園）への異文化適応や集団適応、また第二言語（外国語）としての日本語の獲得プロセスについての学術的研究はまだきわめて少ないといってよいであろう。ようやく帰国子女の日本への受け入れや適応の問題に文部省も積極的に取り組み始めたところであり、外国人の子どもの問題はまだ後手にまわっている現状であろう。

大人の異文化適応や第二言語の獲得等に関しては、比較文化心理学や言語学などですである程度の報告がなされている。また、子どもの第二言語の獲得に関しては、バイリンガルの子ども（多くは両親のうちどちらかが日本人でどちらかが外国人といういわゆるハーフの子ども、もしくは外国で長く生活をした帰国子女）を対象としたものであることが多い（たとえば、唐須，1993など）。一般に大人よりも子どもの方が新しい言語を獲得するのが早いと経験的にいわれているがその理論的予測や説明は不十分である。

先述したように外国人幼児の異文化適応についての研究は多いとはいえないが、その数少ない研究に、宮川（1989）および宮川・浅井（1988，1989）による、アメリカ人幼児の日本の幼稚園における適応過程を分析した事例研究がある。この研究では対象となったアメリカ人幼児（兄弟）が異文化環境にできるだけスムーズに適応していけるように教育的介入を行いながら、対象児とその周囲の子ども達に関する詳細な資料（ソシオメトリック・テストによる客観的データや自然観察法による記録、スナップ写真など）をもとに、外国人幼児の集団場面における仲間関係の展開過程や日本語の獲得過程、それらをもとにした異文化適応過程を詳細に分析したものである。

また、宮川（1991）は、中国残留孤児子女や日系ブラジル人の児童を対象とした、学級担任教諭への面接による回顧的資料と研究者による写真やフィールド・ノート資料を組み合わせた分析手法による事例的研究も試みている。

我が国における日系ブラジル人の子どもの異文化適応に関する研究はほとんどないに等しい状態であるので、先行研究によって彼らの異文化適応過程についての予測をするのは難しい。また、日系ブラジル人といっても、彼らの家族やブラジルでの生活における日本文化の影響も多種多様である。日本語や日本的な文化や生活習慣と無縁といってもよい家庭で育ちながら、家系をたどると日系人であるとのことから来日する人々から、ブラジルにおいてもある程度日本語が話され、日本的な生活習慣を残している家庭で育ち来日した、あるいは来日後に日本で生まれた子どもまで様々である。こうした家庭的背景や両親の日本語の理解力や獲得状況、来日時年齢、きょうだい構成などによって日本での異文化適応プロセスに大きな差異が生ずる可能性もある。

我々の一連の研究は、これまでの外国人の子どもに関する宮川の先行研究を踏まえてさらに別の質的資料の収集・分析手法の確立の可能性を探るために、日本の保育園に入園している日系ブラジル人幼児の異文化適応過程の解明をめざして計画されたものである。このうち先に宮川・中西（1994）として報告したものは、その異文化適応過程の解明と同時にビデオカメラで収録した映像資料を中心として記述・分析する事例研究の手法の開発を目指したものであった。一方、一連の研究の2番目にあたる本報告では、自然観察による記録データの数量的分析による解明を目指している。

方 法

対象児の属する保育園の沿革 本研究の対象となった2名の日系ブラジル人幼児が在籍しているのは愛知県豊田市直立Ⅰ保育園である。0－2歳の乳児クラスから5歳児クラスまでである、全園児数120名前後の、自由保育主体の保育園である。本研究が開始された1992年9月26日時点では、在籍園児数122名、0－2歳児13名1クラス、3歳児が10名と9名の2クラス、4歳児が23名と22名の2クラス、5歳児が23名と22名の2クラスという構成であった。このうち、16名が日系ブラジル人であった（内訳は0－2歳児クラスに5名、3歳児クラスに3名、4歳児クラスに4名、5歳児クラスに4名）。また、この年度（平成4年度）から豊田市が隣接する小学校との兼務（外国人子女教育指導員）で活躍する、1名の日系ブラジル人女性を補助職員として採用し、Ⅰ保育園にも定期的に来訪し、日系ブラジル人家庭と園との連絡文書の翻訳や通訳に携わるようになった。このため、日系ブラジル人家庭と保育園との連絡も比較的円滑にしている。この女性職員はポルトガル語を母国語としながら、ブラジルの日本語学校で小学校の時から日本語を学んできたとのことでポルトガル語－日本語のバイリンガルとも判断できる状況にあり、母国で幼稚園教諭の経験も有しているとのことである。

このⅠ保育園が日系ブラジル人の子どもの受け入れを開始したのは、1990年（平成2年）度からである。まずその年の7月に日系ブラジル人幼児の第1号として、後述する本研究での対象児－事例1－と親しい仲間関係を展開する女児Mを3歳児クラスに受け入れたのを皮切りに、10月に1名、11月に1名、翌年の2月と3月にそれぞれ1名ずつ、計5名を受け入れている。1991年（平成3年）度には、4月に12名（このうち、3歳児クラスに入園した男児に後述する事例2の男児と親しい仲間関係を展開する男児TとGがいる。Gは翌1992年4月から隣接するH保育園に転出するが、同年11月にⅠ保育園に復園している。また、同年の5月に3名、6月に3名、12月も1名（この子どもは約1カ月で近くの私立H保育園に転出）、翌年3月に2名と計21名を受け入れている。1992年（平成4年）度には、4月に3名（1名は7月末で退園）、5月に1名、6月に3名（うち1名は7月末で退園、もう1名は10月に転出）、7月に1名（2カ月在園した後、9月中旬に近くの私立H保育園に転出）、8月中旬に1名（2週間ほどで退園）、9月に3名（うち1名が本研究の主対象となった事例1の女児、もう1名が同じく主対象となった事例2の男児であった。残りの1名は他の保育園に4カ月3週間在園経験を持つ男児Sであり、事例2の男児とも親しい仲間関係を後に展開していた）、11月に1名（私立H保育園から再転入してきた前述の男児G）、翌2月に1名（別の市内の私立保育園に11カ月在園していた男児I）の計14名が入園している。Ⅰ保育園に1992年9月から翌年の3月にかけて在園した日系ブラジル人の子どもの概要については宮川・中西（1994）を参照されたい。

対象児 本研究の主たる対象児となるのは筆者らがⅠ保育園とコンタクトを持ち始めた1992年9月に入園したばかりの2名の日系ブラジル人幼児である。

事例1：ミカエリ（仮名） 1992年9月16日に5歳7カ月でⅠ保育園に入園した女児である。5歳児クラスのすみれ組の一員となる。すみれ組には男児10名、女児12名が在籍していた。その中には既に2年2カ月の在園経験を持ち、日本語かなり上達している日系ブラジル人女児Mが含まれていた。ミカエリは、日系ブラジル人4世で、父方の曾祖父母が

ともに日本人の移民であった。家族は両親と小学校1年の兄の4人家族である。ミカエリは来日直後に入園したのであるが、入園時には簡単な挨拶程度の日本語が話せたとのことである(1992年10月12日付けの同保育園N主任の話)。母親も「祖父母が日本語を話すため、来日前にもミカエリは少し日本語がわかったと思う」(1993年8月19日、通訳を伴っての家庭訪問時の面接による)と語っており、主任の話とも符合する。また、来日前に本国で1年間保育園に通園していた経験があるとのことである。なお、入園の面接を行った保育園側の判断によると、日系人3世である父親はその時点で少し日本語を理解できたが、母親は理解できないようだったとのことである。

事例2：ジュニオール(仮名) 1992年9月1日に5歳4カ月で入園した男児である。4歳児クラスもみじ組の一員となる。もみじ組には当時男児11名、女児11名が在籍していた。うち男女各1名ずつの日系ブラジル人幼児がいたが、ジュニアールの入園直後に相前後して退園している(男児は9月15日付けで退園、女児は10月3日に別の保育園に転出した)。これら2名の日系ブラジル人幼児とジュニオールとのかかわりがどの程度あったのかについては不明である。また、前述したように、11月16日には、前にこの保育園に約1年在園した後に、別の保育園に転園し(約7カ月)、また復園してきた日系ブラジル人の男児Gがこのクラスに加わっている。

ジュニオールは父方の祖母が日系人2世(両親とも日本より移住)ということだが、行政上の取り扱いは日系人4世ということになっている。家族は両親と本児の3人である。入園時に面接を担当した保育園側によると両親ともに日本語は理解できなかったということであり、ジュニオールも入園時には日本語は全く理解できなかったといっても過言ではないだろう。

基礎資料の収集及び方法 ①観察日時：録画は1992年10月12日からほぼ1週間に1度の割合で午前中の自由遊び場面を中心に行った。本来ならば、これらの対象児の入園直後から観察を開始することが望ましいのであるが、保育園に我々が最初に訪問したときに既にこの二人とも入園していたこと、10月初旬に行われる運動会が終了してから観察を開始してほしいとの園側の要望があったことなどから、入園後約1カ月が経過した時点から観察を開始することとなった。観察は1992年3月まで続けられたが本研究では当初の3カ月分のデータを分析することとした。また、行事、設定課題等の関連、あるいは観察初期の対象児が観察者やカメラを意識して自然な状況ではない状況など本研究の分析に向かない観察日のデータは除外した。具体的には、9月から12月までの10回の観察のうち、ミカエリに関しては1992年10月21日・28日・11月6日・11日・12月2日の5回分、ジュニオールに関しては計14回の観察のうち10月28日・11月6日・11日・12月2日の4回分を分析の対象とした。

②観察の時間：観察は午前の自由保育場面を中心に行った。だいたい時間にすると9時半から11時過ぎまでであった。また、2名の対象児がほぼ同じ割合(約40分ずつ)になるように観察時間を適宜配分した。

③ビデオによる録画：本研究の基礎資料は以下の方法で収集された。まず、本研究の主対象となる2事例の様子を自然的観察法の手法により、自由遊び場面を中心に軽量ビデオカメラ(ナショナルのブレンビーシリーズNV T1, SVHS-Cの16倍デジタルズームカメラ)を使用して定期的に映像資料を録画した。撮影は第2筆者が担当した。

④筆記記録：ビデオによる映像の録画記録の収集と並行して、第1筆者（子どもの行動観察に関しては既に十数年の経験を有している）が自由記述の形で筆記による観察記録も残している。

⑤データの具体的分析：収録された映像記録と記述データを元に、対象児の一人遊びを除き、仲間と社会的相互作用をもった場面のみを抽出した。そしてひとまとまりの相互作用をエピソード（中西ほか、1989）と呼ぶことにした。この場合、遊び相手や遊び場所が変わった場合は別のエピソードとなる。観察の記述データをエピソードごとに区切り、a) 対象児の使用している言語（日本語かポルトガル語か両者が混在している状況か）、b) 遊びの構成員の国籍（日本人かブラジル人か両者の混在か）という観点から量的分析を行った。なお、データの質的分析に関しては宮川・中西（1994）で報告しているのであわせて参照されたい。

結果と考察

事例1：ミカエリの場合 ミカエリの観察データを分析・整理した結果、10月21日には5、28日には29、11月6日には17、11日には10、12月2日には24の、計85のエピソードに分けることができた。

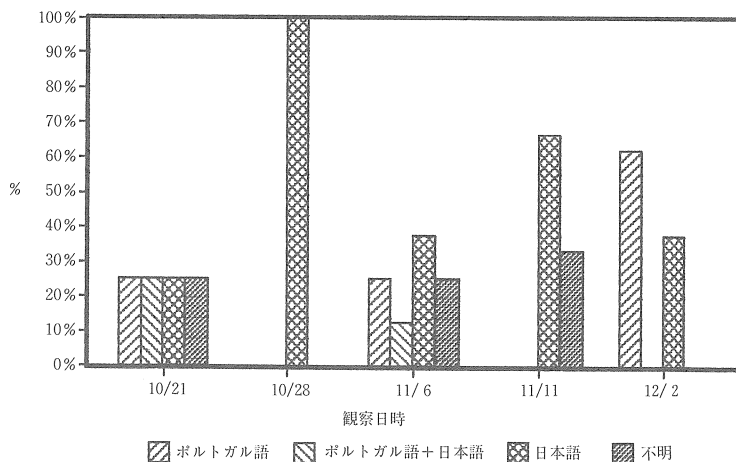


図1 遊び場面で使用されている言語（ミカエリ）

a) 使用されている言語：全てのエピソードから言語の使用が明らかなエピソードのみを抽出した。エピソード数は観察日時順に、4、19、8、3、16であった。それぞれについて使用されている言語の種類を、ポルトガル語、ポルトガル語と日本語の併用、日本語に分類し、その割合を図1に示した。図から明らかなように、入園後、約1カ月が経過した10月21日に既に日本語のみを使用したエピソードがみられている。この回は、観察されたエピソード数自体が少ないのであるが、ポルトガル語、ポルトガル語+日本語、日本語のエピソードがそれぞれ1回ずつ観察された。このときの全てのエピソードの遊び相手と

して、ミカエリと同じクラスのポルトガル語と日本語のバイリンガルであるMが含まれていた。また、10月28日は全てのエピソードにおいて日本語が使われている。この日はほとんど教室内で過ごしており、遊び相手もまたすべて日本人だったため日本語が使われていたのである。いいかえれば、日本語のみでコミュニケーションが可能な力をミカエリはこの時期には身につけていたと言ってよいだろう。その後も、遊び相手にブラジルの子どもが入っている場合はポルトガル語が使われることもあるが、わずか3カ月足らずで日本語で十分遊びを楽しめるようになってきている。

表1 遊びの構成員（ミカエリの場合）

	ブラジル人	日本人+ブラジル人	日本人
10.21	5		
11. 6	8	3	6
11.11		3	7
12. 2	14		7

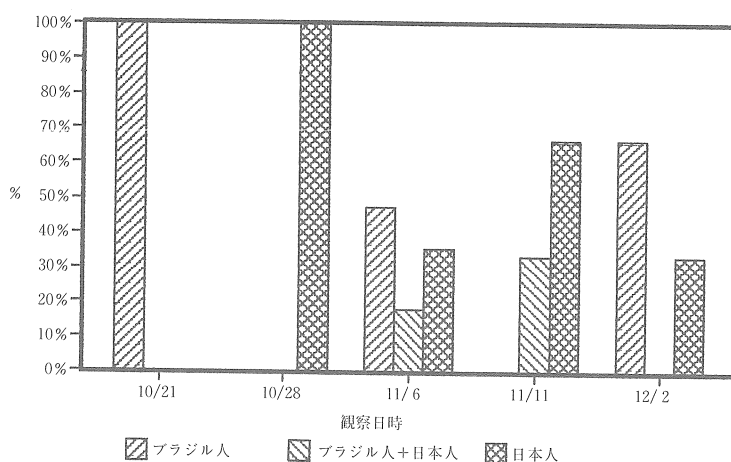


図2 遊びの構成員（ミカエリの場合）

b) 遊びの構成員：次に全てのエピソードのミカエリ以外の参加者（遊びの構成員）を国別に分類したものを表1に、それをグラフ化したものを図2に示した。図から明らかのように、10月21日以外は、日本人やブラジル人の子どもの混在する中でミカエリは遊んでいる。10月21日の遊び相手は先に述べたように、同じクラスのバイリンガルのMであるが、ミカエリの日本語の獲得につれて、かならずしもMに仲介してもらわなくともミカエリの日本語で十分日本人クラスメイトと遊ぶことが可能になり、遊びの構成メンバーも広がってきたといえる。

先に、事例の概要で述べたように、ミカエリはブラジルでも集団生活を経験していることと、入園当初より片言の日本語が理解できたこと、ミカエリと同時に日本の小学校への

異文化適応を開始した1歳年上の兄がいること、本児自身の積極的で活発で明るい性格、また同級にポルトガル語と日本語のバイリンガルのMがいたことなどが相乗効果となってかなり早期に日本の保育園生活に適応していったのであろう。

事例2：ジュニオールの場合 ミカエリの場合と同様にジュニオールの観察データを分析・整理すると、10月21日には29、28日には40、11月6日には29、11日には31、12月2日には33の計162のエピソードに分類できた。

表2 遊び場面で使用されている言語と日本語の使用者（ジュニオールの場合）

日時	使用されている言語				日本語の使用者		
	ポルトガル語	日本語	ポルトガル語+日本語	不明	日本人	J以外のブラジル人	ジュニオール
10.21	6	3		2	3	3	
10.28	26	2	4	3			
11.6	15		5	2	1		
11.11	15	1	1		1		
12.2	27						

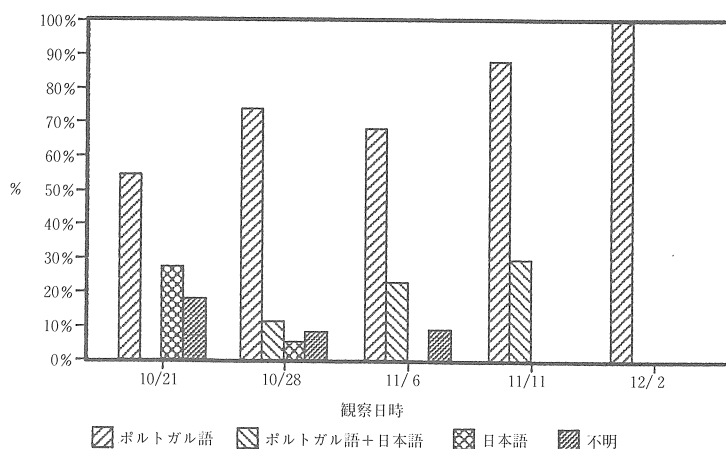


図3 遊び場面で使用されている言語（ジュニオールの場合）

a) 使用されている言語 全てのエピソードの中から言語の使用が明らかなエピソードを抽出すると、観察日時順に、11、35、22、17、27であった。それぞれについて使用されている言語の種類を、ポルトガル語、ポルトガル語と日本語の併用、日本語に分類したものの、および、日本語の使用者をあわせて表2に、その割合を図3に示した。図から明らかに、ジュニオールの場合、時間経過とともにポルトガル語を使用する割合が高くなっている。また、10月の2回の観察で使用されている日本語もジュニオール以外のブラジル人もしくは日本人が話したものである。

表3 遊びの構成員（ジュニオールの場合）

	ブラジル人	ブラジル人+日本人	日本人
10/21	17	6	6
10/28	29	2	9
11/ 8	21		8
11/11	26	2	3

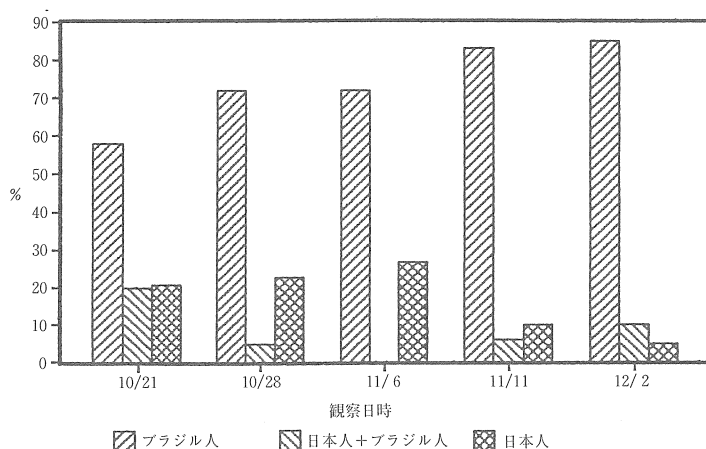


図4 遊びのエピソードの構成員（ジュニオールの場合）

b) 遊びの構成員 全てのエピソードのジュニオール以外の参加者（遊びの構成員）を国別に分類したものを表3に、それをグラフ化したものを図4に示した。図からジュニオールはブラジル人同士で遊んでいることが多く、しかも月日を経過する毎にその割合が高くなってきている。保育園関係者の話によると、ジュニオールが入園するまでは、クラス内に複数のブラジルの子どもが在籍していても、ブラジル人同士が閉鎖的な小集団を作ることとはなかったとのことである。しかし、日本語ができず、また体も大きく目立つ存在であるジュニオールが自分の周囲にブラジル人を従えるようになり（彼はいわゆるガキ大将タイプである）、結果的に彼の入園を契機にこのようなブラジル人幼児の小集団が出来上がってしまったのである。ジュニオールが従えている子どもは日本語もうまく（いわゆるバイリンガル）、ジュニオールが側にいないときは日本人の子どもたちと対等に遊ぶこともある。ジュニオールは歌などで片言の日本語も獲得しつつあったのだが、ブラジル人の集団を構成したことで日本語の獲得は停滞を来していた。しかし、集団適応という観点からすれば、母国語の使用が可能な仲間の存在はポジティブに影響していたといえよう。わずかなではあるが、ジュニオールと日本人の子どもとの関わりもみられるが、この場合の遊びの内容はじゃれ合い等の言葉をあまり必要としないものであった。

ミカエリとジュニアールの異文化適応過程の比較 ミカエリは既に集団生活を経験していたことや片言の日本語を入園時に理解できたこと、また家庭においても同じように日本

の小学校に就学した兄がいること、また、父親も日本語を少し理解できたことなど、集団生活も日本語に対しても全くはじめての体験ではない。そのために、初期の適応過程は非常に順調であり、園関係者の話からもなんら不適応のサインも示されていない。

一方、ジュニオールの場合は、両親ともに日本語が使えないため、家庭ではポルトガル語のみの生活を過ごしていると推測される。幼児の場合、一般的には比較的是やく第二言語を習得していくのであるが、彼の場合、同年齢の日系ブラジル人男児Tと親密な仲間関係を形成するにつれ、特定のブラジル人幼児を中心とする（Tおよび11月にジュニオールのクラスに再転入してきたG）閉鎖的な小集団を形成し、彼らだけで主にポルトガル語を使用して遊ぶようになっていく。TやGはバイリンガルであるので、ジュニオールがいない場面では流暢な日本語を使うことができるのだが、日本語が全くできないジュニオールに引きずられ、園内でのポルトガル語の使用が急激に増加していったのである。ジュニオールと日本の子どもとの関わりは全くないわけではないが時間の経過とともに減少する傾向にあった。また、実際の観察の記述データから、Tが側にいないとジュニオールがTを探して側に呼び寄せる場面も何度かみられた。母国語であるポルトガル語が仲間関係では十分通用するのでその分ジュニオールの日本語の獲得には時間がかかっている。また、ジュニオールだけではなく両親も日本語の獲得がスムーズにいったとはいえないので、母国での日本文化に触れた経験の絶対量がミカエリの家族とは著しく異なっていたのであろう。

ジュニオールの初期の異文化適応過程はミカエリだけではなく、このI保育園に在籍する他の日系ブラジル人幼児と比べても特異なものである。しかし、逆の観点からみれば、彼のように現地の言葉（この場合は日本語）をほとんど理解できなくても母国語が通用する仲間がいれば、文化の差によるストレスやコミュニケーションが十分ではないことから生ずるストレスの影響をほとんど受けることがないようである。ミカエリ同様、ジュニオールもなんらの不適応行動や登園を嫌がる行動もみられていない。また、この子どもたちを受け入れているI保育園の保育の内容が自由保育主体であり、設定課題でも参加を強要するような保母からの強い（圧力にも似た）働きかけはない。緩やかな枠組みの中での保育であることがジュニオールの本園への居心地をさらによくしたことだろう。

ほぼ同時期に入園しながら、きわめて対比的な初期の異文化適応過程を示した2事例を特に観察データの数量的分析という観点から比較・考察してみた。子ども一人ひとりの個性という個人的な側面だけではなく、子どもの背後にある家庭の異文化に対する受けとめや理解もまた子どもの初期の適応に影響を及ぼしていることが伺われた。

付 記

本研究を進めるにあたり、I保育園園長の清水充子先生をはじめとする職員の方々、園児の皆さんにはご理解とご協力を賜りましたことを深く感謝申し上げます。また、事例1・2として紹介した幼児の保護者の方、およびI保育園と豊田市役所福祉部児童家庭課のご理解にも深謝いたします。また、豊田市福祉部児童家庭課に所属し、I保育園に補助職員として勤務されご活躍されている長野マルシア恵先生には主たる対象児の家庭との連絡や通訳などにおいて大変お世話になりました。記して感謝の意を表したいと思います。また、最後に、1992年度の筆者の人間関係学部での授業（ケースメソッド：観察法）の受講生の

皆さんにもデータの収集や分析を一部担当してもらったことを記しておきたいと思います。

また、本研究の一部は第4回日本発達心理学会、第42回東海心理学会、第35回日本教育心理学会において発表いたしました。

文 献

- 愛知県教育委員会 1993 特集外国人子女教育の現状 教育愛知 6月号, 41(3), 6-31.
- 国友隆一 1992 日本の中の国際化地図 日本実業出版社
- 宮川充司 1989 アメリカの子どもが日本の幼稚園に 小嶋秀夫(編)乳幼児の社会的世界 有斐閣 p. 141-164.
- 宮川充司 1991 日本の小学校における中国残留孤児2世・日系ブラジル人児童の異文化適応に関する事例的研究 会津短期大学研究年報, 48, 39-57.
- 宮川充司 印刷中 帰国子女・外国人子女教育 坂野雄二・宮川充司・大野木裕明(編)生徒指導と学校カウンセリング ナカニシヤ出版
- 宮川充司・浅井道子 1988 在日米国籍幼児の日本の幼稚園への受け入れと適応：入園直後の半年 会津短期大学学報, 45, 25-44.
- 宮川充司・浅井道子 1989 在日米国籍幼児の日本の幼稚園への受け入れと適応(その2)：入園後の半年から1年半 会津短期大学学報, 46, 37-81.
- 宮川充司・中西由里 1994 日系ブラジル人幼児の異文化適応に関する事例的研究(I) 椋山女学園大学研究論集, 25, 47-74
- 文部省 1992 にほんごをまなぼう(教科書・教師用指導書)ぎょうせい
- 文部省 1992 にほんごをまなぼう2(教科書・教師用指導書)ぎょうせい
- 名古屋市民政局児童部保育課 1992 保育所日常会生活会話集—みんなともだち—(英語・中国語・韓国朝鮮語・ポルトガル語・スペイン語各版)
- 中西由里ほか 1989 四つ子のきょうだい関係 小嶋秀夫編 乳幼児の社会的世界 有斐閣 p. 58-73.
- 唐須教光 1993 バイリンガルの子供たち 丸善
- 豊田市教育委員会 1993 外国人子女教育ポルトガル語対応指導資料集—会話集・学校案内・物語文—